

今日のイエスさまのお話は、一度聴いたら忘れることが出来ないはずの不気味さを秘めています。けれども、そのことに気づいた私たちは、聖書の中のこのイエスさまのお話だけは、あまり読み返したいとは思わないのも事実かもしれません。このお話には、私たちの良心を刺す棘のようなものを感じずにはいられないからです。「福音」が喜ばしいメッセージという意味であるなら、どうして今日のようなイエスさまのお話が福音と言えるのだろうかとお感じになる方も少なくはないのではないかと思います。

今日のイエスさまのお話は、この世の生活の場面と死後の陰府の世界の二つの場面から構成されており、その中で、場面が変わると、二人の登場人物の運命は全く逆転しています。ラザロのような境遇を生きざるをえない多くの人々にとって、イエスさまのこのお話は、確かに慰めとなる福音かもしれません。けれども、ラザロにとって、この世の生活を生きるかぎり、状況は何一つ変わることはないのです。彼に与えられる唯一の慰めはイエス様が語られた死後の世界への希望の中にしかないのです。金持ちの家の門前で、誰にも顧みられることなく、見捨てられた人として生涯を終えたラザロにとって、イエスさまのこのお話は本当に福音になったのでしょうか。

他方、死んで陰府の世界に落ちた金持ちにとっての死後の世界は全く絶望的です。彼の願いはもはや何一つ聞き届けられることはなく、どんなに願ったとしても、陰府に落ちてはじめて気づいた、自分の生き方をやり直すことはできないのです。この結末は、私たちにはあまりにも陰惨なものであり、そのようなことを考えると恐怖しか感じられないと言わざるをえません。イエスさまのこのお話を聴いて、一つだけ私たちにも読み取ることが出来る点があるとすれば、金持ちが陰府の底から自分の兄弟たちのことを思って、ラザロを彼らのところに遣わすように頼んだ願いに答えてアブラハムが言ったことばの中に見出すことが出来るかもしれません。「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」。モーセや預言者たちを通して、つまり聖書全体を通して神が、まだこの世の生活の中にあるあの金持ちの兄弟たちや私たちに語る大切なことは、常にわたしたちの側にいる貧しい人々への配慮を忘れてはならないということです。ここに今日のイエスさまのお話の結論があると言ってもよいでしょう。けれども、このことを教えるためにイエスさまが語られた今日のお話は、私たちにはあまりにも暗く、不気味すぎて、直ちに喜びをもって受け入れることは難しいものです。

けれども、イエスさまの福音は、私たちがそれを聞いて、心慰められ、励まされる神さまの大いなる憐れみの愛による救いの約束を語るだけではなく、私たちのありようを問いただし、回心を促すおことばでもあるのです。それらのおことばが私たちにとって、真の福音となるのは、私たちがイエスさまのおことばを受けとめることによって、自分自身のありようを変えることができたときです。つまり、イエスさまのおことばに従って回心することが出来た先に、私たちはイエスさまのおことばが、私たちにとって真の福音であることを悟ることが出来るのです。そのような意味でイエスさまの福音は常に、私たちへの問いかけであり、真の幸福への招きです。私たちにとって信仰とは、イエスさまがそのおことばをもって私たちに呼びかけておられる真の幸福への招きに気づき、それを受け入れて行くということです。

ラザロのような状況を生きざるをえない時、私たちには、イエス様が語られた、この世の生の彼方においてラザロを待っていた、アブラハムとともに味わう天の宴席の喜びを信じて、この世のむごい現実を生き抜く力を得て行くことが求められています。ラザロのような境遇の中で、イエスさまがラザロに保証してくださった喜びを信じて生きるということは並大抵のことではありません。しかし、それが十字架の死を超えて復活されたイエスさまが私たちに対する信仰の招きなのです。

私たちの現実の生活は、イエスさまのお話の金持ちの人の暮らしぶりとはほど遠いものです。ぎりぎりの生活と将来の不安の中で、それでも家族のためにたまには、少しの贅沢も許されるのではないかとというようなところで多くの私たちは、つつましく生きているのが現状かもしれません。けれども、そのような私たちにも、このお話を通してイエスさまが求めておられることに変わりはありません。ともに生きるより貧しい人々への心配りを忘れ、自分たちの生活不安だけに心を奪われるとき、私たちの世界はお互いの間に溝を深めるだけの、それゆえ、あの金持ちが陰府の世界で直面することになったような、真の人間の世界とはほど遠い、救いのない世界に落ち込んで行くしかないこととなります。このことの中に、今日のイエスさまのお話の、今の私たちの世界に対する警鐘を聴き取るべきかもしれません。そのイエスさまの告げる警鐘に心を向け、イエスさまの求めておられる私たちの生き方の転換がなされる時、今の私たちの世界を分断する、持てる者たちと持たざる者たちとの間の、不気味な壁が乗り越えられ、真の平和への道が開かれることになるのではないのでしょうか。イエスさまの今日のおことばを、私たちの世界とそこに生きる私たち一人ひとりを、そのような真の人間同士の関わりが実現する世界へと導こうとされているイエスさまの福音として受け止めて行きたいと思えます。

今日はカトリック信者である私たちにとって、世界難民移住移動者の日です。バチカンのこの部門の責任者としてその生涯の最後の奉仕をささげられた故浜尾大司教様を偲んで、世界各地の難民キャンプの劣悪な環境の中で、与えられる援助物資だけを頼りにその日その日を生きている数知れない人々のことを思って、私たちのささやかな、しかし心のこもった配慮の実を示して行くことを誓いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高